第 10 章　ボールが転がり始まる

アメリカ人が去ったことで日本国民だけではなく日本政府も不安を感じていた。1931 年の初頭に日本がアジアの征服計画を開始してから最初の 10 年間、アメリカ政府が極東に対して行ってきたことは、何れもハッタリではなさそうだということが分かってきた。これまでのアメリカの行動は中国におけるアメリカの資産とアメリカ国民への日本の攻撃に対して公式に抗議するだけだった。日本の外務機関はこれらを他の数百のものと一緒に謹んで記録して保管した。アメリカ政府の行動が日本の九カ国条約違反（**）と「法律尊重主義的」な公文書への違反に対する抗議と交渉にとどまっている段階では、日本人は全て順調にうまく行っていると思っており、陸軍は、中国におけるアメリカの資産の爆撃も、アメリカ国民の侮辱もできるのだと都合よく考えていた。「感情的な」アメリカ人が少し動揺しているのが当然だが、しばらく経てば極東でのこの動揺している状況にも適応することが出来るようになるだろうと思っていた。

(**九カ国条約（きゅうかこくじょうやく、Nine-Power Treaty）は、1922 年（大正 11 年）のワシントン会議に出席した 9 か国、すなわちアメリカ合衆国・イギリス・オランダ・イタリア・フランス・ベルギー・ポルトガル・日本・中華民国の間で同年 2 月 6 日に締結された条約[2]。列国は中国の独立と行政的、領土的保全を約し、門戸開放と機会均等の原則を承認した。Wikipedia)

1939 年夏の米国からの日本との通商条約（*日米通商航海条約）の廃止通告は少しやり過ぎだったが、それにもかかわらず、日本の多くは決定というよりは「感情」の問題だと感じていた。このことは 1940 年 1 月の正式な条約失効後に米国による誤った行動によって裏付けられ、外務大臣は国会で全てが以前と全く変わっていないと断言した。アメリカでは通商条約を失効させたたことで達成感があり、日本では米国からこれまで以上に材料を購入することが出来ることを知り、満足感があった。その後の 1 か月の間に、アメリカから日本への輸出は 1939 年の同時期よりも 1 千 2 百万ドル増加していた。鋼製品の積み荷の価格も同様に上昇し、日本のスクラップの購入は 1 千万ドル減少して、十分に相殺された。石油、機械と銅の輸入は全て増加した。全体として、日本は通商条約失効後のアメリカの良好な行動に満足し、「経済圧力」だと不満を集中砲火しながら、その裏で、この喜びを隠すのが賢明だと考えていた。これは、孤立主義者と、彼らのワシントンにいる混乱した友人を支援する日本の政府報道官による一般方針と一致し、彼らは、日本を刺激する危険性があることを警告することで、日本が現実的に恐れているアメリカ人であるルーズベルト大統領への妨害を強化することになった。

しかし、アメリカ国務省が日本政府のみと交渉するのではなく、アメリカ国民にも極東から撤退することを勧告し始めると、初めて、財閥と軍国主義者はワシントンの善意に不安を感じるようになった。アメリカが経済的処置を行う準備をしている可能性が極めて高まり、実

行されると企画院の軍需計画が崩壊することになる。従って、外交機関はアメリカからの抗議を保存続ける以上の何かを行う必要が出てきた。アメリカの「強硬姿勢」を攻撃するために二つの方法があった。一つは血気にはやる大使をワシントンに送り、出来たばかりの三国同盟を適応し、枢軸国で民主主義国家への戦争に協力すると脅迫して孤立主義者をゾッとさせて中止させる方法だった。これは松岡外務大臣が最初に意図したことで、彼は近衛首相とともに、既に報道で米国に対して、日本は真剣であり、もしワシントンが従わなければ戦争になるだろうと警告していた。

もう一つの方法はアメリカ政府を尊重し、極東危機を解決するための交渉でのアメリカの敵意を抑制することが期待される「穏健派」の大使を選ぶことだった。これは財閥が選択したもので、アメリカで長期に滞在していた松岡よりも、アメリカ人の心理には合っていた。彼らは、松岡の外交機関の首席顧問である白鳥敏夫のような枢軸国の扇動者を任命すれば米国に日本への強硬な行動を誘発するだけだと気付いていた。アマースト大学で学び、純粋にアメリカを理解することを願っていた樺山伯爵を含む、何人かの実業家が、陸軍の友人を通して軍国主義者に「穏健派」の大使をワシントンに送ることを説得し、温厚で、好感な、野村吉三郎海軍大将が推薦された。

残念ながら、日本の外交官に付けられた「穏健派」という言葉は米国で発行された時には「無意味」という言葉が付随されることはなかった。時代遅れの「穏健派」の多くが、この 10 年間、残されているのは事実だが、無数の他の「穏健派」は国家主義者と軍国主義者によって抹消され、たとえ抹消されていない彼らも、その政策的な影響力は一掃された。彼らの多くはほぼ毎日、東京にあるイギリス主体の記念塔であり、消滅された東京クラブ（**東京クラブからアメリカ人が脱会し、新たに東京アメリカンクラブを作った。東京倶楽部とは異なる）ので見かけることができた。私も会員であるこのクラブは、警察にとっては不評で、彼らは、ここは、多くの外国外交官と旧来の「自由主義者」がビールを飲んだり、アメリカ人にはサッカー場を思わせる大きなテーブルでビリヤードを遊ぶイギリスの競技である、スヌーカーの 1 セットをしたりするために出会う、東京の無数のスパイが集まる中心地だと見なしていた。それでも、元外務大臣である有田八郎と野村伯爵、前駐仏大使の沢田廉三、貴族院で「アメリカを好む」ことで知られている樺山伯爵、衆議院議員で「親米派」とされている笠井重治が定期的にクラブに訪ねてきた。しかし、彼らの日本の新しい軍部への影響はほとんどなくなっていた。彼らは消滅する過去の日本の亡霊であり、彼らが 1941 年の日本について表明した意見は啓蒙することになるよりも、誤解を与えることになることに私が気付くのにそれほど時間はかからなかった。

従って、陸軍は堀内謙介の後任の駐米大使として「東京クラブの人物」の誰かを選ぶことに同意しても重要性はなかった。共通して「亡霊」あるいは「現在完了形の」と言われている人物を役職にしてアメリカ政府の当局者を安心させることが出来るなら、軍国主義者は喜んでその人物を提供しようとした。軍国主義者は、新たな大使を選んだ実業者と大使と関係が

ある「穏健派」を、軍国主義者のカモフラージュや彼らの攻撃について謝罪するために頻繁に使用していた。野村は外務大臣だった時に陸軍の欺瞞を味わっており、そのことをよく理解していた。グルー大使と長江下流での外国貿易の再開を誓約する権限を与えられたが、その後の陸軍の中国攻撃に対する米国による「善意」な相互関係の即時表明が期待に背くことになり、実現しなかった。野村はワシントンでの大使になることを辞退した。陸軍から促された松岡は野村になるように二回懇願したが、揺るがない野村は自分の立場を堅持した。三回目の懇願も受け入れられなかった。最終的には彼の商売仲間と東京クラブの他のメンバーからの絶え間ない訴えの結果、陸軍と海軍の両者が日米間で合意に達するために尽力する彼を支援し、これが十分に保証される条件で彼は受け入れた。

合意案の基礎の多くは財閥によるひらめきから生じた。それは、日本の「門戸開放」の原則の再編成に米国を招待して共有して中国を開発するというもので、招待された米国が日本の宴席にやって来てくれるだろうと考えていた。英国とフランスはいずれも当時は敗戦国としてみなされ、日本の軍国主義者からは軽視され、多くは除外されていた。日本の軍閥のリーダーによって破壊された中国の再建のために米国は資金を提供する用意があり、日本は利益を確保するために必要な知能以外に、その保証を提供することになっていた。このスケールは広大で、中国全土をカバーしていることを除ければ、その計画は、陸軍から支援された満州国の産業の大物で、その傀儡国の資源開発のためにしばしば、アメリカの資産を保証しようとした鮎川義介の初期の提案とは異なっていた。

中国の開発に日米企業が共同作業をした前例はなかったわけではなかった。US スチールの故エルバート・ゲーリー社長はモルガン家とも関係があり、第一世界大戦中に日本を訪問し、米国に帰国時に中国の資源開発のためには中国人に資金を貸すよりも、直接日本人に貸した方が安全だと言ったとされている。ジャパン・クラニカルの前編集長のA・モルガン・ヤングによると、この考え方は中国を威嚇することに成功した元総理大臣の伊藤侯爵によって皮肉的に変換され、中国に必要なのはアメリカのお金と日本の頭脳だと言ったとされている。A・モルガン・ヤングの現在の日本への見解は非常に鋭く、イギリスへの訪問後は日本再入国が拒否されている。J・P・モルガンと近い間柄で US スチールと Guaranty Trust 社とも関係があるトーマス・W・ラモントは第一世界戦争終了後に、中国の合弁企業を設立するために東京を訪問した。その目的は中国への融資を独占し、資金が中国人軍閥のリーダーや新たな市民戦争に消費されないことを監視するためだった。もう一人の訪問者はニューヨークの National City Bank の故フランク・A・ヴァンデリップ社長だった。合弁会社の目的は中国復活のための融資することだった。中国のボイコットによって成功しなかったが、それでも、日本人はアメリカ人の財界と親密な関係を築くことが出来た。

この関係のうち、特に日本の鉄鋼のトップの日本製鉄と、モルガン家、US スチール、ベツレヘム・スチール、リパブリック・スチールといった数社の鉄鋼会社との連携を基盤として、日本の財閥は中国に新たな資金調達を設立し、このことによって日米政府間の合意が促進さ

れることを願っていた。日米の財閥間での合意のための準備は既に何回か行われていた。トーマス・ラモントがこれらに関与することを全て拒否したのは彼の先見の明の信念による。彼の打診への回答として、ラモントは日本の軍国主義者が 1937 年に開始した征服計画を非難した。しかし、日本は望みを捨てることはなく、1939 年に官営の日本製鉄とは間接的につながりがある樺山伯爵が親善大使として、ロックフェラー・センターに日本の機関で、彼が会長である国際文化交流を設立するために米国にやって来た。しかし、最も重要な任務は、中国の発展における日米の共同計画について米国財閥に再度打診することだった。彼とラモントが出会う手配がなされたが、ラモントは以前のようには興味を持っていなかった。彼の任務は失敗に終わり、東京に戻った。

しかし、アメリカの業界で利益を確保し続ける者がいた。それは藤沢フジ（Fuji Fujisawa）（新たな国粋主義的スペルでは Huzi Huzisawa となる）で、1938 年にニューヨークに送られ、トリニティー・ビルに、米国から日本に輸入する全ての鉄スクラップを一括購入する代理店事務所を設立した。互いに競争させて、米国のマーケットでの鉄のスクラップの価格を上昇させる代わりに、三井、三菱を含む様々な日本の鉄鋼輸入業者は、非常に賢明に、個々のスクラップの購入者毎に、アメリカの売り手間で競争させることによって最低限の価格に維持しようとした。藤沢は非常に好感な実業家で、彼とは 1940 年に彼の妻が病で日本に帰国時に私は会ったことがある。彼にはスクラップの購入以外に、アメリカの鉄鋼会社との金融協定の交渉の仕事が与えられたが、それは比較的簡単なもので、多くをコロンビア大学で学んだ若い日本の部下に任せた。彼の最大な事業は、ニューヨーク・バンクと巨大なローンを組み、ベテレハム・スチールからの供給を買うことだった。銀行との交渉は 1939 年の冬には満足できる展開で進んでいて、彼を代表とする東京の実業家たちは締結されるに違いないと思っていた。しかし、最終的にはベテレヘム・スチールがこの取引の続行を断ったことが分かり、日本はアメリカ政府による干渉によると疑っていた。アメリカ政府は既に日本との通商条約を非難していたからである。しかし、1940 年 1 月に通商条約が失効になったころ、藤沢は他の大手のアメリカ製鉄会社との取引締結に成功し、100 万ドルの鉄鋼を、半分は現金で、半分は信用取引で日本に売ることで合意した。

アメリカの財閥がまだ興味を示していたことに励まされ、日本は交渉再開を試みた。そして、そこに野村海軍大将がやってくることになった。若い海軍将官としてワシントンに駐在した時に、野村はルーズベルト大統領と会ったことがあり、ルーズベルト大統領の「友人」として報道されたことさえあった。海軍軍人である野村は、米国海軍士官の中に多くの友人を作り、彼らはやがて、日本海軍での野村と同じように、米国海軍での高い地位まで登りつめた。日本は大統領と米国海軍の共感的理解が確保されれば、それがアメリカ政府の日本への態度を大きく左右し、中国での新たな業務協定への基本合意に達するかもしれないと感じていた。野村はこれまでの関係から大統領と米国海軍と対応するには理想的な人物だと考えられていた。さらに、彼の「穏健派」との評判と愛想の良さと温厚さから、当時の日本人とし

ては最もアメリカ国民から友好的な歓迎を受けることができた。樺山伯爵が後にワシントンで彼に加わり、アメリカの財閥から支援を確保する取り組みを続けることになっていた。

中国についても合意が得れば、残りは容易だと思われた。米国が日中戦争の調停に要職を用意し、中国と米国が日本の中国における「特権」と傀儡国家である満州国を承認することになるであろう。その見返りに、日本政府は南方などの他の地域全てで武力を使用しないことを保証し、形式上はともかく精神上は三国同盟を放棄し、米国が英国を自由に支援することになり、日本のヨーロッパの同盟国を屈服させることになるであろう。

現実には、アメリカ政府は全ての同意を日本の軍国主義者が順守することが適切に保証されなければ、日本政府と議論をするつもりはないだろうと思われた。野村はこれが保証できるかについては非常に懐疑的で、既に述べたように、最初はワシントンへ行くことを断っていた。1940 年の末には、日本の陸軍と海軍は三国同盟とドイツがイギリス侵攻で失敗の間で板挟みになっていて、難しい立場になっており、秘策として新たな構想を用意し、野村に彼の使命を完全に支援することを約束した。軍閥は常に保証を提供する準備ができていた。それには費用がかからず、ほとんどの場合、常に価値のある見返しがあった。これはちょうど、近衛に、もし総理大臣になることに同意するなら、彼が理想していた全体主義国家の樹立計画を支援することを約束したように、野村に、もしワシントンに行くならば、米国との合意のための彼の努力を支えることを約束したのである。野村は海軍については、陸軍ほどは心配していなかった。そこで、1940 年の 12 月のワシントンに出発する前に、現場で日本の大将たちから直接保証を得るために中国を訪ねた。陸軍は誠意であることを示すために、ワシントンで野村を支援する特別な担当者を任命した。それが岩畔豪雄大佐で、彼は陸軍の一般幕僚の一員で、最近の日本の攻撃を引き起こした若手過激主義派将官のリーダーの一人として知られていた。

私は野村が米国に向かう前に何回か会談したことがある。1940 年 11 月に正式に大使に任命される直前に東京クラブで日米の状況について長い議論をした。私は彼の任命の目的については既に知っており、彼が得た陸軍と海軍からの保証の性質について興味があった。彼はこれらを明らかにすることを断った。彼との会話から感じた全体的な印象は、彼はワシントンで成功する可能性について、あまり楽観的ではないことだった。彼は自分の仕事は「嫌な」任務だと言及しており、私は、彼は本当にやりたくなかったが、断り続ければ非国民だと見られる圧力があったがために、やることにしたことを知った。ワシントンでの日米通商条約の廃止通告を批判し、野村は、これによって日本は原材料を求めて南太平洋を注目せざるを得なくなったと、ワシントンに行かざるを得なくなった不遇の原因を指摘した。日本人の中で、特に軍国主義者が一般的に怖れていたのが、アメリカが極東からアメリカ国民を避難させた後に、日本への軍事物資の輸出を禁止し始めることだった。

我々が東京クラブを出て石段を下っていると、野村は誰よりも印象的な意見を語った。その

言葉を覚えており、その印象を忘れることはない。それは以下のことだった。「もはや、すべては我々の手に負えない。結果は天が決めることになるだろう。」ワシントン赴任直前の外交官が、このような非常に運命論的な発言をしたことに、たとえ彼が日本人だとしても、心を打たれた。野村のような気質が陽気な人から発せられたことで、なおさらそれを感じた。

ヘラルド・トリビューンへの私の記事を書いた後、野村から事務所に、明日、私がニューヨークに電話をする前に、その原稿を読みたいので、海軍倶楽部（*水交社）まで持って来て欲しいとの電話があった。倶楽部には彼の就任を祝福し、彼の幸運を祈るために多くの海軍の友人が集まってきた。彼らがいなくなってから、私たちは部屋の隅の小さなテーブルの所に座って、その記事について話し合った。彼は 1932 年に中国侵攻に参加した時の戦艦の司令官だったが、その時に上海で襲撃を受けて片眼を失っていたため、記事を読み終わるのにかなりの時間がかかった。彼はいつもべっこう眼鏡をかけていたが、それを額に上げて、裸眼で見ることを好んでいた。結論として、全ては彼が最初に言ったことだと語ったが、記事の最初の部分を除外することを依頼してきた。その部分には彼の運命論的な意見も含まれていた。彼は、これらは発行するにはあまりにも悲観的であり、そうではなく、彼がワシントンに行く理由は、日米間で同意する「可能性」があると信じているからであると書くよう提案した。彼は言いたいことを、私がタイプライターで書いた原稿の裏に、英語で書き下ろした。

彼はほんのわずかでも、合意する「可能性」を信じていることが明らかになったことで、私は彼が提案した通りの記事を送った。しかし、私は彼が言ったことを忘れることはないし、その後の私がヘラルド・トリビューンに送った記事に少なからずの影響を与えた。翌朝にニューヨークに電話をかけ、記事の結びには、野村は「偉大な英雄か悲惨な失敗者のいずれかとして戻ってくる」と述べた。1940 年 11 月 27 日という遅い時期に、このような意見を述べてもあまり危険はなかった。この時には「天」は既に日本とアメリカの平和はあと 1 年余りしかないことを知っていた。

さらに野村の任務の見通しが暗雲だったことを示す兆候は、翌月に帝国ホテルで行われた日米協会による新大使への送別昼食会でもたらされた。その場での主な講演者だった松岡外務大臣が、協会がアメリカと日本間で生み出そうとしていた友好を完全に台無しにした。松岡には巧みな話しぶりが出来る才能があり、彼の雄弁力と冷酷で悪意のある性格を惜しむことなく誇示したが、彼には分別がほとんどないという恩恵があり、これが彼を失脚させた主要な原因の一つであった。今回は、アメリカ人に、うわべ上には、かなりの友好的なしぐさをしたあと、米国が日本の中国での「道徳的な改革運動」に対して干渉していると非難し、日本は類のない国家であり、その事業実行を妨げないよう要求した。この、真の国粋主義風に髪を短く刈った、狭量な外務大臣は日本が枢軸国に忠実であると何度も述べ、彼の外交方針が三国同盟を中心に展開し続けることになるだろうと語った。昼食会の目的をこれほど効果的に妨害することは出来なかった。しかし、この野心的な外交家に言えることがあ

るとすれば、これは陸軍の大御所の意見をよく反映され、軍国主義者が彼にもっと上手に外交指針に準じてやって欲しかったとしても、これらを隠すことは出来なかったということだ。

ドイツ大使が外務省に圧力を加え、野村海軍大将のアメリカ行きを阻止しようとしたが失敗に終わり、彼が出発する直前に、天皇が彼を皇居での特別な観衆に呼んだ。宮廷関係者からの情報によると、天皇は野村に日米間の同意を得るよう全力を尽くすよう頼んだという。野村は最善を尽くすことを約束すると答えた。検閲官は私がこれを記事として送ることを許さなかった。これには、これを事実であると信じるにたる十分な根拠があった。それは、ある意味「自由主義」的な伝承で育った裕仁は、民主主義諸国との戦争のために、皇民の運命と同様、自分自身の皇位を危険にさらしたくはなかったからだ。しかし、天皇と野村は、軍国主義者が戦争を支持すること決定すれば、ことを阻止するには如何に無力だったのか分かっていたに違いない。野村は目隠しで軍国主義者のために、やりたくもない役として、ワシントンで使われるかもしれないと強い恐怖が確かにあったが、未来への最後の挑戦をやってみる、おおいな勇気を持っていた。これまで何回か期待を強く裏切られてきたが。

野村がワシントンに到着した後に、彼の陸軍補佐の岩畔大佐は 3 月に出発して野村と合流する準備が出来ていた。樺山伯爵は、最初は野村と共に日本を去る予定だったが、今後の展開を待つことを決め、陸軍省での私とのインタビューを手配してくれた。陸軍次官の承認のもと、岩畔は陸軍には「現在の日米間での宣告無き経済戦争を停戦」する準備があると述べた。野村がワシントンでの特派員とのインタビューで、日本が南方への拡大計画において、武力行使はないとは断言出来なかったことを私が指摘すると、岩畔は、彼は発表する立場にあり、「武力行使することは絶対にない」と述べた。それに続き、彼は、日本は南太平洋からの原材料を至急に必要としているが、これらを得るためには平和的な方法のみを使用する事になるだろうと述べた。彼はさらに、中国問題について米国と同意に達するとの楽観的な考えを示した。

陸軍の中で過激派の一員が突然に親善を表したことに少なからず疑いを感じた。私は野村のワシントンへの任務以上に深刻な事態が進行していることを知っており、新大使と岩畔はどちらも陸海軍によって、南太平洋領域への攻撃準備を隠匿するために使われていたのに他ならないかのように見えてきた。1941 年 2 月 18 日、私は、松岡が翌月にベルリンとモスクワに向けて出発し、そこで、この外務大臣は不可侵条約の締結を期待していたことを暴露するために、出来るだけ曖昧な文章でヘラルド・トリビューンに電報を送った。翌日、ニューヨークに電話をかけて私の電報が届いているかを調べ、定期的に行われる検閲済みの記事を読んでもらい特別な電報を明確化にしようとした。私が電報を読み始めると、検閲官の丸山が回線を切った。その後、検閲官から私が何をしようとしたのかを尋ねて電話がかかり、私は説明した。彼は私に前夜の伝言を読むようにと言われ、松岡のヨーロッパ訪問に関して読むことは全て禁じられていることを教えてくれた。私はそのことについては言及しないことを約束して、再びニューヨークと話すことが許され、私の電報の半分が日本の検閲で切ら

れて、理解不能になっていることを知った。同じ日に私は事件について個人的な手紙を書いたが、その手紙は検閲がこのニュースを海外へ送ることを許可した 1 週間前にカリフォルニアに届いていた。外務大臣の訪問を公表するのに、これほど長期の遅延がある事を知っていたら、ニューヨークに太平洋から船便で記事を送っておけば、東京から電信で伝えるより前に届き、それは既に公表されていたに違いない。

私が電報局に電報を残したその日、日本はこれまで米英の報道機関に仕掛けた中で最も巧妙な策略の一つを仕掛けた。それはすべて松岡の仕業であり、その功績は松岡に帰すべきものであった。外国特派員との記者会見で、石井康報道官は、これまで滅多に読んだことのないような用意された声明を読み上げ、日本は世界のいかなる紛争においても仲裁する用意があると述べた。当然ながら、このニュースは米英両国に全文提出され、そこでは日本が英独間の戦争において仲裁する用意があるとする大きな見出しで報道された。松岡のモスクワとベルリンへの訪問が差し迫っている情報が他の特派員にも既に知られていたため、石井の読み上げた声明は不合理であり、私はそれを完全に無視することにした。その代わりに、私は外務大臣の欧州訪問に関するニュースを送ろうとした。もしそれが検閲を通過していれば、策略は何のためだったかが分かっていただろう。

この策略の目的には二つの要素があった。第一は、日本の陸海軍がインドシナ地域で軍事行動をするのではないかという数えきれない噂と、オーストラリア、米国、英国で極東危機が差し迫っているという警告を数多く発表したことで生まれた、初めての太平洋戦争の恐怖を消失すること、第二は、松岡がモスクワとベルリンに訪問しようとすることで、民主主義諸国を混乱させることだった。この策略はこの発表には日本の「平和的意図」を証明する幅広い風評が加わり、日本が南方を攻撃する噂とは相反しており、非常にうまく行った。これは、アンソニー・イーデン外務大臣が松岡から、石井からと同じような声明を受けたことで、英国下院で公表されたことで、さらに宣伝された。

私はその週の後半に個人的に石井を訪問し、彼が読んだ声明は松岡によって準備されたものであり、彼はその「仲裁」の部分については誇張するつもりはなく、「あまり文字通り」にとらえるべきではないことを認めた。彼はまた、このストーリーは極東での戦争の脅威に喚起されたアメリカ人とイギリス人の感情を「冷静」させるためだと言う私の考えにも同意した。従って、この報道官は、事実上、宣伝行為だったことを認めたことになるが、それは彼の上司の指示で行われたことであり、彼にはその責任を負うことはなかった。石井は人間的に松岡を激しく嫌っていた。

石井は彼の相談役や我々の記者会見に参加した外交機関のアメリカ職員で混乱していなければ、彼自身の責任で故意に、或いは非意識的に嘘をつくことを見たことがなかった。彼が以下のことを認めたことで、私の彼への、彼のこれまでの上司よりも、誠実な日本職員であるという印象が裏付けられることになった。私は石井に松岡のベルリンとモスクワへの訪

問につて尋ねた。石井は、記事は本当で、松岡は既にソビエトへのビザを取得していると告白した。彼はまた、松岡はヒトラーから個人的にしつこく要求された結果、ベルリンに行くことになったことも認めた。最後に、私は、ドイツ大使が、松岡に対して、読み上げられた仲裁の発言と、イーデンに送ったメッセージついて非難したことを聞いていたが、彼これを追認した。これは私が、そして恐らく全ての特派員が日本の公的な報道官から得たなかで最も有益な議論であった。

民主主義諸国を欺こうとする松岡の行為は大胆過ぎた。ドイツ政府は日本が戦争を仲裁する用意があるとの声明に非常に激怒した。英国は松岡からイーデンへのメッセージを如才なく公開し、これが石井の発言からの、ドイツは既に同盟国である日本にヨーロッパの戦争を仲裁するよう頼んでいるのではないかという印象を裏付けることになった。これはドイツの弱さを示す兆候のように見え、不幸にもナチスはあらかじめ松岡からイーデンへのメッセージや石井の発言の目的について知られていなかった。ドイツのオイゲン・オット駐日大使は急いで外務省に出向き、松岡の事件を撤回することを求めた。そこで、外務大臣は二つの特別記者会見を設け、ヨーロッパ戦争での仲裁に関して英国に特別な提案したことを否定し、同時に、民主主義諸国に対して、日本からの攻撃を見込んで、それに対抗するために太平洋に軍事準備を行うことで日本を刺激しないように、警告を発した。こうして、既に外国報道では公表されている声明について、彼自身がその目的を明らかにすることになった。

平沼男爵は松岡にとって最大な敵で、最近、入閣し、大政翼賛会内の左翼の行動を鎮圧し、財閥と軍国主義者間に新たな協力を作ることで、大失敗した外務大臣の立場を弱めようとした。しかし、松岡は軍閥から強く支持されており、軍閥は翌月に極めて重要な任務として、彼をヨーロッパに送ったことで、内閣の彼を更迭させようとした試みは、失敗に終わった。私が初めて松岡のモスクワとベルリンへの訪問についてグルー大使に述べた時に、彼はそれに関しては相当懐疑的になっていた。それは恐らく、野村がワシントンに出発したばかりであることと、陸軍が米国と合意することを願っていると明言していたこととは矛盾していたからだと思われる。私が岩畔と会う前に、彼は既にアメリカ大使館の参事官で、グルー大使の主要なアドバイザイーでもあるユジーン・ドゥーマンと長い間、話し合っていた。大使館の職員は岩畔の意見をその後、彼らが受け取った事実よりも重要視しているように見えた。今になると岩畔は大使館に行ったのは計画的に職員を欺くためであることは明らかで、これは丁度、松岡がアメリカとイギリスの報道を欺いたのと同じだった。新聞特派員には、アメリカ大使館員よりも、恐らく、疑い深い性質があったため、日本がこれまで以上に詐欺、裏切りの形として関与している可能性を信じることが出来ていた。軍国主義者は東京では会話でアメリカ職員を勇気づけ、ワシントンには野村海軍大将を送ることで、平和の使命を掲げながら、同時に民主主義諸国との戦争を準備しており、松岡のヨーロッパ訪問はこの戦争と直接関係していた。

外務大臣が東京を去る前に、彼がそれまでやって来たインドシナとタイで行われている国境紛争の解決の交渉を終わらせる必要があった。インドシナとタイに国境紛争に日本の仲裁を受け入れさせようとした理由は両国の国境を軟化させて、実際上日本に占領させるためだった。交渉中に、日本はさらにフランス外交官に、交渉は日本の意のままになっているのだと威嚇し、暴露することで、さらにその自尊心を傷つけた。その一方で、タイの派遣団にタイが日本の同盟国に参加することになっている「大東亜」の原理を受諾させることを試みていた。日本は派遣団の代表であるワラワーン（Varavarn）皇太子を標的として、彼が日本の傀儡の一員になることを願っていた。日本は毎晩、多くの芸者を呼び、飲食でもてなした。帝国ホテルの最高のスイートルームを滞在させ、彼が支払おうとするとそれを受けようとせず困らせた。交渉が終了すると、日本は彼を取り込もうと総力を挙げて働きだした。彼の日本訪問期間を数週間延長させ、彼の妻と若い娘を日本の飛行機でバンコクから東京に呼び、家族で旅行者が興味を持つ日本の美しい風景と様々な場所で驚嘆させる手配を取った。

しかし、ワラワーンは洞察力の鋭い外交官で松岡よりも卓越していた。彼の資質は丁度よい傀儡の器とは異なっていた。外見上は背が高く、頑丈で、若々しく、ワラワーンは東京にいた数か月間、常に着ていたと思われる正服で身を包み、個人的に目立っていた。彼は他のタイの王家の人々と同じように、イギリスで学んだ。私は彼と会話した時には、彼の口調と英語の運用能力は私自身が劣っていることを自覚させた。彼は自分自身の思いと考えを持っていた。彼は日本の「新秩序」を理解することは出来ず、それが意味するのが日本による東アジア支配ならば、タイは参加するつもりはないと述べ、これが記事に引用されることを願っていた。彼は彼の国家が自由であることを望んでおり、日本も民主主義諸国も同等な関係を持つことによってのみ、自由が持続されるのだと表明した。

もし彼が日本に甘やかされ、その見返りにご主人様にこびへつらうのなら、それは日本とできるだけ良好な関係を持つことで、日本が南方への攻撃を決定した場合に、タイに侵攻する理由を作りたくなかったためだと私は信じている。彼はこの危険を承認したくはなかったが、彼が言った話を収集すると、彼はタイもイギリスも日本が攻撃してきたらそれを阻止することは出来なさそうで、また、当時の米国の立場はまだ不確実だと感じていた。タイに米国から有効かつ迅速な支援がなければ、彼の小国が、より武力が強い国を敵に回すのは得策ではないと彼は考えた。彼は甘ったるく、日本を称賛し、へつらったのは傀儡として奉仕したかったからではなく、これによって日本によるタイへの侵攻が回避されることを願っていたからである。もしこれで失敗すれば、タイが自国で抵抗することに効果は見込まれず、民主主義諸国からの十分な支援を得る可能性もないことは誰にも明らかで、他の成功する方法はなかった。

交渉が完了し、ワラワーンにはより自由な時間ができて、私は彼と彼の帝国ホテルの部屋で一晩中、私が重大な大失敗だと考えている、彼の国が日本の「仲裁」への参加に同意したことについて語り合った。ワラワーンは調停したインドシナとビシー政権（**ドイツ占領下の

フランス政権）を強く非難した。彼はタイが何回もインドシナのフランス当局者に直接解決への交渉に応じることを求めたが、フランスは毎回拒否したと言った。さらに続けて、タイ政府は最初から日本による仲裁に反対しており、もしフランスが直接交渉を拒否するなら、戦い続けたかったと述べた。彼はタイの武力で、実際にフランスの抵抗を完全に破壊できると確信していると言いたかったようだったが、インドシナから東京の交渉に出席するためにやっていたフランス当局者の話を聞いてから、ワラワーンの主張は正しいと思うようになった。フランス当局者は彼らの空軍には合わせても老朽化した 5 機の戦闘機しかなく、インドシナの陸軍とその設備品についてはもう言及しないほうが良いと明言した。

もし、フランスがあれほど視野が狭くはなく、ケチでもなかったら、境界論争は、その敵意が増幅して日本が仲裁する口実が出来るよりも、ずっと前に解決できていたはずだったとワラワーンは熱く語った。フランスが日本の介入を同意したから、タイもそれに受け入れることになったのに過ぎないと彼は言った。それを拒否していれば、論争が継続する責任がバンコク政府に課され、日本からは敵対的行為だと見なされていただろう。ナチスからビジー政権に対して日本による仲裁を受け入れるよう圧力があり、フランスが動いた可能性はあるかもしれないが、そのことでビジー政権に責任がなくなるわけではないと、彼は続けた。タイはビジー政権より 1 日前に日本による仲裁を受け入れることを公式に声明した事実が何かを証明するわけではない。フランスは直接タイに何かを譲歩するよりも、日本による仲裁を選ぶことを決めたことで、タイとの交渉は速やかに進行し、仲裁に関する日本の要求を誠心誠意に支えることとなった。私はフランス大使館の参事官であるファイン男爵に、ビジー政権が日本の仲裁提案を最初に受け入れたことについて、ワラワーンが非難していることについて聞いてみた。彼は困惑した様子で、コメントを拒否した。彼はこの事実を否定しようとはしなかった。ビジー政権もインドシナもヨーロッパではドイツから、極東では日本から圧力を受けており、絶望的な状況だったのは明らかだった。

しかし、松岡はフランスに対して別のごまかしを実行した。フランスに日本による仲裁を受け入れさせるために、彼はフランス大使のシャルル・アルセーヌ=アンリに交渉によってフランスに満足できる処理が行われることを約束し、日本外務省がタイが認める最大限の領土を提示していると信じられていた。その領土はほんの少しだったので、フランスは最初、この難局から容易に抜け出すことが出来ると考えていた。しかし、ワラワーンは日本からフランスへのこの約束には気にせず、殆どが元々はタイの領土をフランスが奪ったものであり、それを返還させることを要求した。フランスはこれを拒否し、日本がフランスに最初に提示した範囲を超える譲歩を認めるよう強く求めるまで、様々な交渉が行われた。交渉後のワラワーンのコメントは以下だった「フランスは私をトーストの上に乗せようと思っていたようだが、しかし私は彼らをトーストの上にうまく乗せることが出来たと思っている。」

今は、日本が両国をトーストの上に乗せているが、インドシナとタイでの国境戦争と日本による仲裁の結果は、その後の進展には実際上、あまり影響を及ぼしていなかった。日本はや

ろうと思えば、直ちにインドシナ侵攻は可能だったし、一方で、南太平洋への全面的攻撃開始の準備が行われるまではタイの占領は不可欠ではなかった。ワラワーンも同じ考えを持っているようだったが、彼が日本による南方攻撃に対して現実的な恐怖を見せようとはしなかった。しかし、日本が南方に攻撃してもしなくても、タイ人は彼らの領土を奪回しようとすれば、損失するものは殆どないと感じていた。ワシントンからタイに対して提案があった。それはインドネシアへの請求を延期し、後にヨーロッパ戦争後の平和会議で議論するというものだったが、ワラワーンはこの提案には殆ど同意せず、フランスと交渉しても何も戻ってこないに違いないに述べた。これは、誤った武力を正すために武力が行使されたもう一つの例だった。

ワラワーン皇太子は自国が日本から大量の軍需物資を購入したことを率直に認めた。彼は英米が自国での軍需の需要と供給が不安定で、タイに売ろうとはしない、或いは売ることが出来ない状態になっており、これらをどこで買うことができるのかと私に尋ねてきた。日本からの購入は物資か金銭で支払われており、日本からの軍需物資の贈与は全くなかったと彼は主張した。タイの日本当局者はタイにフランスへの攻撃をけしかけていた可能性が高いが、タイ人にはそのような励ましは必要なかった。タイが持っていたフランスへの長い間の怒りはよく知られており、日本がインドシナ全土を占領するよりも前に、機会があればすぐにも失われて領地を奪回したいというタイ人の願いは、理解できる。

日本はタイを占領し、傀儡政権を樹立して、タイ軍の対民主主義諸国への変更に成功したように見える。しかし、ワラワーンによる指摘からいえることは、まず、タイの自由の身にある人々は日本による「大東亜」構想を支持しようとは思っていないこと、第二に、彼らがインドシナに攻撃したのは日本が彼らに望んだからではなく、長期間の怒りからであること、第三に、フランスが最初にこじつけと策略によって介入を受け入れるまで、日本による紛争の「仲裁」の試みに抵抗してきたこと、最後に、タイ人は侵略者を排除する見通しが現実的になれば、恐らく、日本と敵対する可能性があった。

活動的な外交家の松岡洋右は、彼と天皇のお陰でインドシナとタイ間の仲裁が成功したのだと主張し、その栄光の余韻に素早く、しかし、大々的に浸かってから、スターリンとヒトラーにも劣らない、より重大な課題に取り組む準備が出来た。これ以上重要な任務を任された日本人はおらず、これほどの海外を困惑させた日本の任務はなかった。好戦的で狭量な外務大臣は日本の政策において民主主義諸国を困惑させることで目覚ましい成功を収めたが、同時にその実行で不運な目に遭ったように見える。日本政府は彼の訪問を出発するまで秘密下にしたかったが、多くの日本の「国家秘密」と同様、国外では日本国民が公式声明で知らされるよりもかなり前から知られていた。しかし、訪問の目的の秘密事項は守られ、その重要性が十分に理解されるまでには数週間がかかった。松岡の訪問についての公式声明では彼がヨーロッパに行くのは同盟国のリーダーへの表敬訪問とヨーロッパの状況を視察するだけだとされていた。この間、私は日本にいたが、日本政府の訪問の発表ではその意味に

ついてはほとんど語らされなかった。それは、表敬訪問の日程には松岡がヒトラーと会って連携して民主主義諸国を攻撃する約束を取り、ソビエトと、日本が待望の南方への侵攻の間に、北方国境を保証する条約を締結することが入っていたからだ。

松岡がヨーロッパに出発する 2 か月前の 1 月にドイツ大使館は日本に対して連携して対民主主義諸国戦争を促す新たなキャンペーンを開始した。この外交活動について特別な秘密主義的なところはなかった。それは、東京にいる全ナチス運動員は既にそのために集められ、東京の前線に配置されていたからである。ナチスは日本の陸海軍、外交機関、さらには財界や新聞分野で働いていた。私はナチスのプロパガンダについての詳細な情報を、ドイツ国営新聞社である D. N. B.の特派員からそのプロパガンダの精神を全身に注入された日本の新聞記者から得ることが出来た。D. N. B.の特派員たちの話によるとドイツ政府は英国海峡近傍に二千機の巨大輸送機を集結させ、四万人の軍隊をイギリスに上陸させる準備ができていることを日本に保証する用意があるという。同時に、このドイツ人はドイツはソビエトとの国境には百万人以上の軍隊が集結しており、このことによってソビエト軍の動きを封じ、日本の北方前線でのロシアからの恐怖は排除することが出来ると主張した。また、英国諸島への侵攻を開始する準備は出来ているが、それは日本が連携してシンガポールと他の極東のイギリス占有地を攻撃した場合であり、こうして、大英帝国が両側からの打撃によって崩壊し、同時に米国は中立状態の恐怖に陥り、動くことが出来なくなると説明した。

こうして、1941 年の初頭、三国同盟締結の 4 か月前に、イギリス侵攻という暗黙の約束はナチスのみでは完結できないことを日本は知らされた。ナチスは日本の軍国主義者をうまく騙すことができ、軍国主義者は近衛をうまく騙し、近衛公爵は天皇をうまく騙して、三国同盟に調印するだけで、ドイツはイギリスに侵攻し、そして、日本は妨害されずに大東亜構想を遂行することが出来ると信じ込ませることが出来た。ナチスは異なった調子でさえずっていた。三国同盟が効力を持つのは全調印国が行動した場合のみだった。もし日本がイギリスへの戦闘に加わりたかったら、日本は英国諸島崩壊「後」ではなく「前」に、その戦争に参戦しなければならなかった。

日本の軍国主義者は少なくとも 2 か月は軍国主義者の仲間達や内閣のメンバー達とナチスの春の攻撃と連携することに得策があるのかを議論していた。それは、ナチスが彼らに連携して欲しかったからではなく、彼らがやりたくてたまらなかったからである。近衛と平沼を代表とする慎重派は何もせず、イギリスが崩壊するのを待ち続けたいと思っていた。総理はこのイギリス崩壊は 1940 年の夏に起こると考えていた。ナチスからは何回か失望されていて近衛と平沼は現状維持に甘んじていた。しかし、軍国主義者は何もしないでいるやけにはいかなかった。彼らはアメリカ艦隊が三国同盟によって大西洋と太平洋でちょうど半分ずつに分けられていることを望んでいたが、主要な艦隊は真珠湾に残っていた。さらに、米国は英国とオランダ領インドと共に真剣に極東での防衛強化を開始した。同時期に、東洋から米国民を撤収させたことで日本は経済的圧力に備えなければならなかった。陸軍も海軍も出

来るだけ早期の作戦時に、南方に進行したかった。こうして、3 月に全閣僚からの同意を確保し、軍国主義者は松岡を派遣し、ヒトラーから、その作戦時期がいつ頃になるかを探らせた。日本の「出来るだけ早期の作戦」が意味するのはスエズ運河を占拠するか、英国諸島に侵攻することだった。もし、ヒトラーが春にイギリス侵攻の用意がある、あるいは、スエズ運河を獲得できることを松岡に確信してくれれば、日本は南方に攻撃しようとしていた。

これが松岡のヨーロッパ訪問の本質だったが、その途中でソ連との条約に署名する予定だった。この条約は、ヨーロッパでの枢軸国による状況が一定の条件を満たせば、春に日本が極東の英国領とオランダ領を攻撃するために必要だと内閣が決定したものであり、重要だった。第一次世界大戦後初めて、日本政府は、1941 年 3 月、一流国と戦争を行うことで一致した。この決定には、米国は極東には関与しないこという前提があった。

1941 年春の戦略は、軍事政権への感情を排除して得られた正確が証明された過去の情報源から作られたもので、最初の全インドシナとその後タイを占領した時のような段階的に南方をゆっくりと進行するのではなく、台湾、海南、中国沿岸基地から直接シンガポールとオランダ領インドに正面攻撃を開始するものだった。米国は軍事介入しないと考えられていたため、アメリカ支配のフィリピンは攻撃しないことになっていた。外務大臣がヨーロッパから帰国する前に、ある情報提唱者が「松岡がやることはボタンを押すことのみであり、作戦が開始するだろう」と言った。

4 月に松岡がベルリンを離れ、帰国する途中でモスクワに戻る時に、私は内閣の決定と松岡の訪問についての全容を知ることが出来た。私は最初、その全容を真面目に受け入れることが出来なかった。その後、証拠が積み重なり、様々な情報源から入ってきた。最終的にはこれを受け入れざるを得なくなった。これは私が、世界で最も退屈で、一見、平穏無事な場所の一つだった東京で、初めてそして、唯一、著しく動揺されることだった。私は日本人の友人に私は東京を去るべきなのか彼の意見を聞いてみた。彼は、誰も松岡が受け取ったヒトラーの回答の中身を知られていたいので、助言することは出来ないと言った。私が外交官たちと危機について議論した時に、意見は以前と同じように分かれていた。若い人々は内容を信じる傾向があり、他は、私の最初の時と同じで、それをむしろ懐疑的に受け止めた。驚いたことに、私が信じた太平洋での現実的な戦争の恐怖は、それがほぼ完全に海外には知られることがなく経過し、海外では 2 月の最初の恐怖はそれを出版した新聞社の版とともに消え去っていた。東京の新聞特派員はこの危機をほのめかす以上のことは出来なかった。内閣の決定を公開しようとすることは投獄されることを意味していた。

それから数日後に、松岡はモスクワで中立条約に署名し、差し迫った日本のシンガポール攻撃の道筋が外交分野で深刻に受け止められるようになった。危険の警告が全ての民主主義諸国の首都に送られ、我々は松岡の帰国を、息をのんで待っていた。近衛首相は日本がより枢軸国とより緊密に協調することを決めたとの表明を突然に二回声明し、一般人に緊張感

を煽った。彼は、政府が「実践」でドイツとイタリアとの関係を強化すると述べ、また、「全ては松岡が帰国後に議論される必要があるだろう」と述べたことで、私が以前に得ていた情報を裏付けることになった。

松岡が 4 月下旬に最終的に帰国した時、報道陣に何も語ることはなかった。外国人特派員は長い間、彼を待っていたが、天皇に報告するために急いで皇居に行かなくてはならないと言って、5 分で会見を解散させた。わずか一ヵ月でアジアとヨーロッパの二つの大陸を渡るという長距離の訪問で非常に顔色は悪く、疲れていた。陽気さも、我々が東京駅で彼が出発する時と変わらなかった。後に、彼の疲労と緊張の原因は単に大々的な旅行からだけではないことを知った。

松岡のベルリンとモスクワ訪問での出来事は松岡と同行したメンバーや、そのことを聞かされた日本当局者から知ることが出来た。松岡の栄誉をたたえた感動的な晩餐会が開かれ、そのごちそうを消化するやいなや、ヒトラーの演劇部屋に導かれた。そこはナチスの独裁者がヨーロッパ戦争勃発以前に訪問した他の外交の犠牲者のための式典が開催された部屋だった。松岡は用意されてきた質問をこの総統に投げかけた。ヒトラーはこれらの質問には全く答えることはなく、その代わりに、激高して英国と米国を非難し、松岡の小さな鼻の下のテーブルをドンドン叩き、民主主義諸国は粉砕されなければならず、日本にはドイツと組んで素晴らしい任務を行う義務があり、そのことによって世界観を変えることになるのだと叫んだ。松岡に同行したナンバーで、東京に帰国後にその場面を述べた永井八津次大佐の言葉によれば、ヒトラーは「彼は会話をしているうちに興奮して、最後にはあまりに興奮して、彼は誰と話しているのか分からなくなっているようだった。」

松岡はヒトラーからほんの少し弱々しく後戻りしながら、退廃的な民主主義諸国は大国である日本とドイツによって粉砕されるべきだという彼の意見に同意した。しかし、彼は、ヒトラーが長い間期待してきた英国侵攻はいつ開始されるのか、スエズ運河の占領はいつになるのかについて日本政府が関心を持っていることを説明した。ヒトラーは彼にそれがやってくることを保証したが、しかし、今重要なのは、米国がその武力を争いに向ける前に、日本が直ちに英帝国への戦闘に参加することだと断言した。松岡は、彼はそれを約束する権限を持っていないことを明らかにすると、これが総統の激怒をさらに刺激した。

質問がドイツのソ連への姿勢に及ぶと、ヒトラーは再び逃げ腰になった。彼は独ソ間の緊張状態を認めたが、最終的に戦争が起こるといった印象を松岡に示すことはなかった。後に、ヒトラーが独ソ戦争の勃発を自ら声明することになったが、彼は松岡に帰国途中にモスクワを通る時に、スターリンに行動には厳重に注意するようにとの忠告を残すことを頼んだ。当時の独ソ間の緊張を考えると、ヒトラーはモスクワでソビエトとの条約署名を考えているとの松岡の発表にはあまり肯定的ではなかった。

巨大な独裁者と、この独裁者になることを切望していた狭量な男でなされた話し合いの結

果はかなり不満足なものとなった。松岡がベルリンを去る時には様々な考えが頭を回ったがはっきりした考えはなかったとされている。彼はドイツがイギリス侵攻、スエズ運河攻撃とソ連攻撃のいずれも、それを行うとの確信を得ることが出来なかった。松岡にとって、ヒトラーは全く理解できず、彼の荒れ狂ってわめき散らしは松岡を感動させるよりは彼に恐怖を与えることになった。ベルリンではドイツと日本の陸軍、海軍、外交官のトップ間で様々な話し合いが行われたが、明確な決定には至らなかった。

松岡のベルリン訪問は失敗に終わったが、モスクワ訪問は大成功だった。東京出発前に松岡は内閣からソ連と中立条約をするかを判断する権限を与えられた。日本外務大臣はベルリンに到着前にモスクワに途中立ち寄って、モトロフとスターリンに打診した。彼らはベルリンからの帰国途中に再度話し合うことを勧めた。松岡がモスクワに戻ってきて、彼が条約することを願っていることを明らかにすると、彼はソビエトの首脳陣からは両手を広げて、歓迎された。持参したヒトラーからの忠告は単に、モスクワでのヒトラーがソ連を攻撃するかもしれないという印象を裏付けたのに過ぎなかった。松岡自身の話によれば、ソビエトの首脳陣がこの条約を 10 分という短時間で結論を出すことに同意するのは当然なことだった。スターリンは自らこの日本外務大臣を送りにモスクワ駅までやって来たが、これはソ連の指導者として前例のない賛辞であった。日本との条約に彼が満足したことは良く分かるだろう。

松岡が頭はヒトラーのことで混乱して東京に帰国した時は、軍国主義者は即座にヨーロッパで何か悪い状況が進行していることを実感した。最悪である独ソ戦争のことが気になったが、それが起きることを信じようとはしなかった。松岡はソビエトの人から戦争が起こる可能性について聞くことは殆どなかった。公式と非公式の情報がその後数週間に東京にひっきりなしにやって来て、それらはドイツとソ連間の緊張が高まっていることを示していた。5 月上旬には私は既に戦争の可能性に関して驚くべき記事を書くのに十分な資料を手に入れていた。しかし、私はそれをすぐにヘラルト・トリビューンに送るには躊躇していた。それは、私はドイツもソ連も訪問したことがなかったが、私よりも両国について精通している外交官と新聞記者の考えでは、両国の衝突の可能性は極めて低かったためであった。ソ連から帰ったばかりのウォルター・デュランティー、ニューヨーク・タイムズの記者で何年もベルリンに住んでいたオット・トリシュス、そして、アメリカ大使館の書記官で最近モスクワからやって来て、ソ連情勢に精通しているチップ・ボーレン、彼らは全てソ連とドイツでの衝突については半信半疑だった。しかし、5 月の最終日までには、外務機関はさらに多くの情報が入手し、日本の政府関係者はこれまで以上に不安を感じるようになった。私はこの記事をこれ以上、留めないことを決め、5 月 31 日にニューヨークに電話した。記事では、ウクライナで小麦の種をまいた後に攻撃し、収穫前の冬の到来以前に軍事行動の完了を願っているナチスの計画によると、もし行われるならば、ドイツ攻撃は 6 月最終日以前に行われると書いてあった。日本が受信した数値によると、ドイツとソ連はそれぞれ約 200 万人

の部隊が前線に集められ、ソ連はウクライナに約 4,500 機の飛行機を集結させていた。

奇妙にも、私の記事が掲載されたニューヨーク・ヘラルト・トリビューン紙が米国から届いた日はドイツがソ連を攻撃した日と同じ、6 月 22 日だった。ヒトラーが戦争布告したことは、記事に書かれたナチスがソ連を攻撃したい主要な理由を裏付けることとなった。それは、ナチスは英国諸島を攻撃する前に、ヨーロッパ大陸の広大な土地にいる唯一の陸軍からの脅威を取り除くことだった。ヒトラーは触れていないが、攻撃には他にも重要な理由があった。産業分野では人手を大いに必要としており、そのためには対ソ連での防衛として維持されてきた数百万人の稼働していないドイツ兵士を動員解除したかった。また、ウクライナの小麦を要求された価格を払わずに確保し、そして、西方面での新たな取り組みにウクライナの労働力を確保したかった。

独ソ戦争勃発のニュースが日本の官僚の足をさらった。日本にとって最悪な状態は戦争で日本がヨーロッパの同盟国から除外され、極東で完全に孤立されることだった。ドイツへの怒りは各方面から上がった。特に松岡は憤慨していた。彼はヒトラーから信頼されなかっただけではなく、ドイツの独裁者はまたも、日本を騙し、ほんの 2 か月前の日ソ中立条約を署名した松岡を笑い者にしたことを自覚した。もし松岡がドイツがソビエトを攻撃することを信じていたら、彼は当然、モスクワでの条約に署名しなかっただろう。三国同盟の条項では日本は独ソ関係でドイツに援助する義務はなかった。それは、ソ連は適応から特別に除外されていたからだ。その一方で、日ソ中立条約締結で日本は北方では何もできなくなり、ソ連はソ連の南方での出来事に対して善行であることを保証したことで、ナチスとの戦争に全力で注ぐことが出来ることになった。従って、全ての点から見て、日本にとって、この条約は外交的に最悪な失策となった。

松岡がニュースで強く動揺していると、説明のためにドイツ大使からの訪問があった。彼は松岡に、約 2 か月で戦争は終わり、これまでのソビエトからの影響がなくなることで、ドイツと日本の意思疎通は良好になると保証した。また、彼は、ドイツは日本に、最近、決定された中立条約を破ってソ連に対して攻撃することを期待していないとも述べた。ドイツ大使の説明で松岡を慰めるのは難しかった。戦争開始翌日に、駐ベルリン日本大使で、ナチスを強く支持している大島浩中将からのメッセージが届いた。それによると彼はドイツが 2 週間でソビエトの抵抗を弱体化し、そして、2 か月以内にモスクワに到達すつもりであるとの情報をドイツ人から得ていると断言していた。

数日間、軍国主義者と閣僚は何をすべきか呆然としていた。この新たな戦争の勃発からの 1 週間、政府の重要な全部署での協議が行われ、特に軍部大臣と海軍大臣による懇談会では早朝から深夜まで行われた。かつての反コミンテルンのグループが再び声を張り上げ、日本が共産主義の脅威を決定的に撲滅するために「神からのお告げで頂いた好機」を手に入れることを要求した。しかし、最大勢力は南方に拡大する計画を続けることを強く主張し、シベリ

ア遠征に従事することは、第一次世界大戦に日本が参加した時のように、危険として、それを強くけん制した。

6 月の最後の 1 週間で、日本の政府と大本営での連絡会議の検討が行われ、軍国主義者が決断に到達した。これは間違いなく、これまでの日本史上最も重要な決断であり、また最大な裏切りだった。これが最も重要なのは日米の戦争が避けられなかったからだ。裏切りなのはソ連とその領土を順守することを決めたばかりの約束を違反し、ソ連に攻撃するとしたことであった。日本は北南両方を攻撃することを決めた。この 7 月 2 日に御前会議での軍国主義者の決定の是認は、信じ難いことに、1895 年の日清戦争後の東京の再現だった。当時、陸軍が北方へ、海軍が南方への侵攻に固執していて、御前会議で、明治天皇が南北両方への拡大に神の恵みを与えたことは、思い出されることだ。1941 年 7 月 2 日、彼の孫の裕仁が同じことを行った。

この決定を記事にするのは危険かつ困難だった。我々の多くは決定された日に、このことについて知っていたが、これは国家の極秘として守られていた。決定について得られた情報をあまりにも正確には明らかにしないために、私は、最初はその一部の重要部分だけを送るのが最善だと考えた。その一部とは独ソ戦争勃発にもかかわらず、南方拡大を維持していることだった。御前会議の前日の 7 月 1 日、検閲官がこの決定についての情報の送信を阻止するとの指示を受ける前に、私は幸運にも、ニューヨークに電話をかけて、記事について「フランス領インドシナ、タイ、フィリピンとオランダ領東インドを含む、いわゆる、大東亜共栄圏の成立のため新たな試みが計画されている」と語ることが出来た。独ソ戦争についての記事と共に、これは私が東京から送ることに成功したニュースの重要な部分だった。翌日、決定について他の記事を送ろうとしたが、丸山検閲官はその記事を送ることを拒否し、それについてはこれ以上述べてはならないと説明した。その時までに彼は指示を受けていた。しかしそのすぐ後に、私は明治天皇の御前会議で行われた決定に従って、南北に拡大させた歴史的な日本の政策について言及した記事を見つけた。私はこの記事の全文をニューヨークに電話で送ったが、この電話で 100 ドルの料金が課され、これはこれまでの二倍以上の料金だった。これは法外な料金を課して、私の通常な国際電話の使用を諦めさせようとする実質上有効な試みの始まりだった。

御前会議で決められたことは全インドシナを占領し、そこに最終的な南太平洋領域への全面攻撃のための基地を建設し、それと同時に、北方の軍隊を移動して、ドイツによって敗北したソ連を待ち受けるというものだった。日本のソ連への攻撃はドイツ軍がモスクワの西にあるヴォルガ川に到達したらすぐに開始することになっていた。ソ連崩壊に伴い、民主主義諸国、特に米国は侵略が差し迫っているイギリスに非常に懸念しており、極東には関与しないと信じられ、日本は大した抵抗のないまま、南太平洋領域を手に入れることが出来ると予測していた。そうして、御前会議の直後に陸軍が秘密下で総動員を指示し、その後、政府は国家総動員法の全条項を適用させ、国家を完全な戦時体制下に置いた。ソ連に対面してい

る満州国と 7 月に完全占領下にしたインドシナの両方に軍部の補強部隊が派遣された。

平沼はソビエトとの中立条約による外交の混乱を利用して、その責任を松岡に追わせ、大臣辞職を要求した。松岡は正当性の程度から辞職を拒否し、この条約を決定する権限を与えたのは内閣であることを指摘し、従って内閣がこの責任を負うべきだと主張した。近衛は彼の内閣の失墜の原因を取って退陣し、新たな内閣を組織したが、前回の内閣との違いは松岡が入っていないことだけだった。軍国主義者と近衛が同意した理由は、ソ連を攻撃するときに政府にとって松岡がいると邪魔になるからというよりは(松岡は既にソ連への制裁が下された御前会議に出席している)、彼がグルー大使と他のアメリカ政府の職員から強い反感を受けていたと言う事実からであった。インドシナ侵攻後、日本は米国の関係が限界点に近づいていることを自覚しており、これは、徹底的な反ソ連のキャンペーンを行った後、彼らが去ったインドシナに戻り、再開するまでは避けたかったことだった。そうして、攻撃的な外務大臣を、アメリカ人にとって残念ながら弱点である「穏健派」の外務大臣に交代して、「融和的」な素振りをすることが賢明だと考えられた。豊田貞次郎海軍大将は財閥と緊密な状態にあり、松岡の後継者としては最適だと考えられた。彼らの違いは豊田が軍国主義者が攻撃しても、警告を述べず温和にしゃべるのに対して、松岡は大声でしゃべり、多くの警告を発し、誰も彼を信じなかったことだった。

豊田の任務はインドシナ侵攻後の米国による全面的な経済的禁輸措置を避けることだった。アメリカ政府は十分に賢明で、「穏健派」の外務大臣の新たな友好的な表明の術中に陥ることはなく、彼は失敗に終わった。インドシナ侵攻直後に行われた民主主義諸国による日本の資産凍結産が実質上の日本への最終通告となり、日本には御前会議での決定及び全ての征服計画を放棄するか、それとも、攻撃を開始するかの選択が残された。問題はどこを攻撃するかであった。元々の計画では日本が全インドシナを占領直後にドイツがロシアを崩壊させ、その後、日本がロシアの後ろに回ることになっていた。しかし、ロシアは崩壊を拒み、近衛内閣はこれまで以上の重大な窮地に陥っていた。

近衛は南太平洋領域の民主主義諸国への再攻撃の着手をソ連が征服される前に行うことを拒否した。ソ連が征服された後なら、アメリカの極東への圧力が緩和される可能性があった。軍国主義者もまた、解決のために悩んでいた。彼らはロシア崩壊まで数週間待機することを決めた。しかし、それは起こらず、8 月の最終日まで、日本は絶望的な状況になっていた。そこで、時間を稼ぐために、近衛はルーズベルト大統領に最後のチャンスとしての嘆願を送り、ワシントンでの野村とアメリカ高官での最後の交渉が許された。彼らが騙した「穏健派」の大使が極東で増強しているアメリカ防衛を速やかに抑制することに成功し、短期的な経済譲歩を手に入れることを期待している一方で、軍国主義者は太平洋戦争に向けて最終的に配置する準備を開始した。